

理論とは何か

「資本の言語」の理論化に取り組むことが、本ゼミに所属して学ぶ最大の目的である。

しかし、そもそも「理論化」とはいかなる営為であるのかが十分に分かっていない。それが何であれ、不明であることを為すことは可能であろうか。

一方、理論化の意味と方法は知らないながらも、この国の「学問」の多くが、外国（主に欧米）製理論の翻訳紹介に留まり、就中、哲学や社会科学においては、独自の地平（理論）の開拓には到底及ばないであろうことだけは、容易に想像できる。なぜなら、幼少から大学まで授けられてきた教育とは、一貫してそのよう（上位下達や外国翻訳）であったからだ。

そして、そうであった理由も、誰にも理解できるのではないか。理由は二つだ。

一つには、封建制度（江戸時代）から急速に近代化を遂げようとしたこの国が、欧米列強諸国からの侵略を恐れ、殖産興業、富国強兵のための科学技術や、近代国家たる法体系や思想を、継ぎ接ぎでも吸収しなければならぬ立場にあったこと。二つには、そのようにして一生懸命模倣し翻訳し学習したにも関わらず、完膚なきまでに叩きのめされて敗戦し、自らの歴史と思想を見失い、未だに事実上の占領状態にあること。

言わば、この二度の欧米化により、国の最高水準の研究者であっても、否、そうであればあるほどに、その研究成果の殆どが、外国翻訳に止まってきたことは必然とも言える。自らの選択とは言え、悲劇であり、悲惨であるとさえ言い得る。

理論とは何であるか。それが不明なのは初学者だからではない。必ずしも浅学非才だからではなく、外国翻訳家としての研究者たちによる「海外理論」を読む以外では、それが何であるのかを目撃し体現したことがある日本人は殆どいないのだ（註1）。

そうであるなら、理論の生み方を学ぶために、「理論化」のために、膨大な海外理論を読み漁ろうとすることは、理論化とは全く別の、むしろ真逆の営為かもしれない。翻訳理論の正確な読者になり、そのためにも外国語の達人になり、原書で読めるようになったとしても、それは理論化を成し遂げたことにはならず、文字通り翻訳家になったということなのだから。

「資本の言語」の理論化に向けた道筋として、後期課題で示した方法は以下の三点である。

(1) デヴィッド・グレーバー『負債論』（原著初版発行、二〇一一年）や、古くはカール・マルクス『資本論』（同、一八六七年）、マックス・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（同、一九〇五年）、ユルゲン・ハーバーマス『公共性の構造転換』（同、一九六二年）のような、歴史社会学的方法である。つまり、これらの書物が「負債と奴隸制」「労働と資本」「宗教と資本主義」「議論と公共性」等の、大きな二つの事象に潜む歴史的関

係性の解明を進めたように、直観と、取材と、主として文献研究を通じ、言語と資本との史的関係を理論化するアプローチ。

(2) 起業家と資本家が日々行なっている取締役会等の経営に関わる会議において、両者がどのような言語(契約・討議)を取り交わしているかを記述し分析する、実践を元にした言語的または言語論的アプローチ。

(3) 実業家の創業期の生活や仕事ぶり、何より、具体的な経済環境と、そこから生まれた「考え」と、さらにそれを述べた「言語」を記述する事実確認的アプローチ。

そのうち(3)についての見取り図を、それぞれの素材は粗いが、後期課題では示した。

「翻訳理論」に該当するのは(1)である。古典的名著はじめ、目標にすべき大著も例示した。(1)(2)(3)のうち、最も骨の折れるのが事実としてこの(1)である。(2)は膨大な情報を既に有するものの別の課題(守秘義務契約書)が残る。(3)はスケッチレベルとしても、絶対的な時間的制約の中で、実ビジネスでの経験と、偉大な経営者たちの過去の書籍に関する読書ストックがあり、取り組み易いために今回選んだ。

(1)はこれからも努力を重ね、読書量を増やし、正確に理解し、要約し、解説し、その後「自説」を述べよう。それこそが理論である。

しかし、本当にそうなのだろうか。

日々の生活実感から、使用している日常言語から、大量のニュースやSNSから、働き、出会い、食べ、思い、考えるあれこれの中から、翻訳ではない、日本的「学問」とは違う、もしかしたら「小説」「理論」「学術」「ルポ」「エッセイ」：おおよそのジャンルにも属さない、囚われない、収まらない、もっと自由で、闊達で、奔放で、独自の、思考と記述の方法があるかもしれない。

それなのに、気が付けば、つつい、大量の本を積み上げ、出張先でさえ高価な学術書を買い入れ、知識を得ようと、お手本にして做おうとしてしまうのだ。どこそこのあの作家が、歴史上の大先生が、このように言っている、と。

ここには、野球の大谷翔平が言うように、「憧れ」もあるとは思う。冒頭に記した「二つの敗戦」の影響も、日本では大きい(註2)。しかし、それ以上に、学校制度の中で長年培われてきた、優秀であればあるほど、優等生であればあるほど、学制の階段を上がるたびに交換し、対価として支払わなければならないなかった、その精神、その隷従、その模倣による徒弟制度の中にこそ、新たな、独自の、画期的な、想念、方法、筆致の芽を阻む根源がある。最も重要であるのは、最高位に価値がある営為は、研ぎ澄まされた自らの思考を、自由奔放に、あたかも天才画家や三歳児がキャンパスに絵筆を振り下ろすかのように、思う存分書き連ねることだ。

バットの振り方なら、日本語の作文技術は、論述や創作の基礎であれば、もう十分に知っている。習い做うことで削ぎ萎えていく、自らの闘う言語を掬い上げ、真の理論化への道を挑むこと、その営為こそが、何よりも大切な理論であり思想だ。

(註1) 理論書でなくとも、言うまでもなく日本人にも極めて優れた社会学の研究業績はある。森元孝『アルフレート・シュッツのウィーン―社会科学の自由主義的転換の構想とその時代へ』(新評論、一九九五年)、同『ヴェーバー後、百年―社会学理論の航跡 ウィーン、東京、ニューヨーク、コンスタントツ』(東信堂、二〇一三年) 他。

(註2) そうかと言って、時に古墳や埴輪にまで遡り、文化や芸術が羽織袴姿で大手を振って闊歩するかのような研究は、現実の悲惨や矛盾の糊塗として、時に歴史修正的分脈でも使用され得ることに自覚的であってほしい。